



幼児の概念形成

波多野 完治

はじめに幼児教育の思想の發展の中で、認識の問題が重視されてきた理由を述べてみたいと思う。

一、人格形成から概念形成へ

日本の幼児教育思想の變化の過程は、大きっぱに言つて、ヨーロッパ的幼児教育思想からアメリカ的幼児教育思想への転換である。この二つの外来思想が日本の幼児教育思想の發展のきっかけとなつたのである。ヨーロッパの幼児教育思想の主張者として代表的なのは、フレーベルとモンテッソリである。二人の教育思想の相違は、前者は人間の魂を、後者は人間の感覚を尊重していることであるが、共通なのは二人とも理念と知性を重視していることであり、これが明治大正期を通じて日本の幼児教育思想の基盤をなしていた。アメリカの幼児教育思想はフロイドの精神分析を基礎とし、人間の感情を重視する。これが日本で一般に浸透したのは戦後である。ヨーロッパの主な主義的立場に対し、アメリカは主情主義的立場を

とつたといえる。こうして感情重視を中心とした人格の問題からこんにちの幼児教育の理論と実践が展開してきた。これは子どももの正しい觀察に導かれた必然の方向といえるであろう。

五才以前の感情生活が人格を支配することは今日明らかであるが、人格形成といつても単に円満な人格を目指すのではなく、未来の社会に対して幼児教育を考えると、その人格のどこに重点を置くべきかを考える必要がある。今後の科学技術の社会では、ものごとを感覚的な不快だけでなく、知性で処理することが要求される。予防注射を嫌う子どもに注射をしないわけにはいかないのである。したがって、人格形成の中で特に重点を置くべきところは認識の問題であると考えなければならぬ。

幼児教育思想の重点がこのように移動したもう一つの理由は、幼児心理学の發展にある。ヨーロッパの幼児教育思想では、精神機能を別々にとり上げて独立に育てようとしたが、一九二〇年頃から人

間の精神機能は互いに関連を持ったものであることが明らかになってきた。特に幼児は精神機能が未分化な状態にあるから、幼児教育では、ある機能をのばそうとするより人格全体をのばそうと考える方がよいと考えられるようになった。更に考えると、未分化といっても感情と知性は幼児でも区別できることがわかってきた。三〜五才、五〜七才に感情は身体的エネルギーの量の充実と関係して著しく発達する。それに対して思考、運動―知性的行動―はエネルギーの形、構造に関連があり、それらは区別できる。そこで人格の基礎となる感情を尊重するには、ただ感情を大切にそっとしておくのではなく、エネルギーの構造(つまり子どもの発達段階)に適應するように、ある程度訓練し働かせることが必要である。

このような社会的、心理学的発展により、幼児教育の中で人格形成を重視するという前提の下で概念形成に重点を置き、認識の基礎を育てようとする傾向に変わってきたのである。

二、概念形成におけるイメージの役割

幼児の認識の中心はどこに置くべきであろうか。認識とは一般に、事物についての正しい概念である。ある事柄についての正しい概念に至る過程は、観察に始まり、事物の正確な把握、他の物との比較、一般化、さいごに説明解釈があり、ここで一段落する。幼児教育では従来、事物の観察のみを重視していた。即ち認識の感覚的、知覚的段階に留まっていた。幼児教育でそれ以上の段階に進むべきかは問題としても、その高次の方向に狙いを定めることは必要

である。

概念形成は幼児では非常に困難であるが、決して不可能ではない。幼児でも、数を知覚的にとらえることはできるし、四、五才になると千や百ではわからなくても二と三の大小がわかり、概念的に処理できる。数概念の初歩の完成した部分と未完成の部分があるわけだが、完成した部分についてはできるだけ正しい概念を与えなくてはならない。

概念が最後に完成し正しく形成されると、イメージがなくなり、ことばだけの抽象的なものになるが、幼児には困難な事で、幼児の「二つ」はビスケットの二つ、「五つ」は指の五つときまっている。頭の中にどんなイメージを持っているかを知ることが大切である。概念を視聴覚的に子どもに与えたものを坂元彦太郎氏はアイコンというが、イメージといってもよい。概念形成の足がかりとしてのイメージを忘れては、認識はうまく育たない。

条件反射の立場をとる人は、認識は正しいことを習慣になるまでくり返し教えられて形成されるものと考ええる。それは悪い考えではないが、重要なのは認識は意味体験だということである。意味を考えることは、幼児はイメージを介入しなくてはできないのである。

認識の問題でイメージのもつ長所は、意味体験を可能にするということ、短所は概念形成の最高の抽象的段階には到達できないということである。その結果、典型的な場合の思考が典型的でない場合の思考を阻害することがあるからである。

このようにイメージが重視されてきた理由の一つに、従来幼児に必要と思われた直接体験が今日ではすべて可能とはいえなくなったことがある。例えば電球やソケットのように触れると危いものや、テレビのようにさわってみるとガラスだが、いろいろなイメージを与えられるものがある。感覚を媒介としてイメージ、認識を得ることが必ずしも重要でなくなり、イメージの役割を考えねばならなくなってきた。こうして現代の幼児の認識の中心はイメージとの距離にあるといえる。

三、時間と空間

時間と空間はイメージを処理する場合のわくと考えてよい。ある出来事を考えるとき、誰が何をしたということは幼児にもかなり早く認識されるが、いつ、どこで、は抜かされることが多いので認識もおそい。

幼児の時間空間の認識の特徴は、幼稚園での一尺や一時間が、家でもやはり一尺で一時間であることがわからないということである。即ち空間のもつユークリッド的性質、空間的等質性がかまれている。即ち空間のもつユークリッド的性質、空間的等質性がかまれている。我々は時間空間の等質性を頭の中に持っており、主観的に感じた時間空間が客観的なものと違うとき、自分の感じた方を間違いだと思うが、幼児は主観的知覚体制に規定されるから、おながが早く時計を六時にすればよいと思ひ、デパートの屋上から見た物が小さいと、ほんとに小さいのだと思ひてしまう。このように場所とむすびついた形をあつかう数学の考え方をトポロギ

ーというが、我々がユークリッド空間を基礎としているのに対し、幼児はこのトポロギー空間を基礎としているといえる。

この時間空間の問題が、幼児の認識が我々の場合と最も異なるところである。

四、概念形成と恒常性

我々のもつ恒常性は生れつきできているものでないことは以上のことからいえる。恒常性は知覚の世界にはないので、見え方はそのときの刺戟の構造で変わってくる。これは、認識の問題では重要である。例えば犬を前から見たときと横から見たときとは違うが、観念の世界では同じ犬として処理する。A || B、B || C という大きさの恒常性は七才頃からわかるが、A || C がわかるのは九才頃からである。これは知覚体制に基く推理であるが、幼児は一つひとつ比べてみないとわからない。知覚の恒常性は変化しているものの中に同じものをつかむ能力である。この能力はかなり小さい頃から表われるが発達が遅い。一才前後で、母親が着物を着替えて現われても、わざと怒った顔をして、まだ笑っているのは恒常性ができはじめたからである。この能力はいろいろなことに適応される。

知覚体制の中にあるものとなしものとの比較、例えば今あるスイカと昨日食べたスイカを比べることは幼児には難しい。比較は認識に至る大事な要素の一つであり、知覚されているものばかりでなく、知覚とイメージ、イメージ同志の比較も必要である。絵本はこの意味からも有用である。

イメージの恒常性は精神の発達に即応して次第に形成されていくものである。芝居の中で悪い人になる人が本当に悪い人かどうかを問題にし始めるのは小学校五年生からである。知覚の恒常性からイメージの恒常性、観念の恒常性をつかむことが認識の発展である。大ききの違うもの、実物と写真と絵をたびたび見る経験は、幼児が知覚の恒常性をつかむ助けとなる。変化しながら同一であるものをつかむことにより、認識は育っていくのである。

五、概念形成と道德観念（道德概念）

結局、認識の問題は恒常性の獲得であるが、これは感情においても同様のことがいえる。知覚体制の変化に伴って感情も変化するが、この変化の中で感情の恒常性を確保する訓練がなされなくてはならない。シェークスピアを読んでつまらないと感じると、自分の寝不足のせいだと思つて何度も読み直し、おもしろくなるとその印象を最終的なものとして固定する。これを感情の恒常性という。幼児では、これは難しいが、これを育てるきっかけになるのは、幼児が好きなおはなしを同じようにそのままくり返すことを要求することである。この時、いつも話し方を変えていると、感情は不安定になつてしまふ。

恒常性をもつためには、知覚体制をそのままの形で受け入れず、感情の現在の動きを統制することが必要である。恒常的感情は昔、情操といったものである。美術や文学の批評家は感情的恒常性がなく、その資格があるとはいえないし、愛情についても同様で、移

り気な人は感情の恒常性の少ない人である。

従来は感情の動きを支配する恒常性を確保するには意志が必要と考えられていたが、今日ではむしろ知性または認識の問題と思われ。意志はその場の感情の動揺、場面的変動に抵抗するものである。心の中で二つの感情が対立したとき、その場の気分が勝つ人を意志が弱い、それを抑えて社会が要求する方を選ぶ人を意志が強いというが、それは外的な規定によつてゐる。知覚体制の特徴はその瞬間の場面の構造によつて左右されることである。人間はこれに抵抗する。すなわちその場の状況に支配されず、他の場面で見たいイメージを補うことにより恒常性を確保する。ここに意志との関連がある。一つのもののみをつめてゐると、そればかりに注意を集中するとそれが次第に大きくなるが、ふと視野を広げて見るとその正当な位置がはつきりしてくる。現在だけでなく過去、未来まで視野を広げることが感情の恒常性を確保するために必要である。この能力がなくて意志を強調するだけでは恒常的感情は確保できない。イメージの認識の問題の発展につれて、意志の問題もやはりここに含まれることが明らかになつた。

これは人格全体に関する問題である。これが幼児の認識教育の基礎で、感覚運動的遊びをさせることと並んで人格形成に関連してゐる。そこで幼児の未分化な状態を考えて、認識ばかりでなく、いろいろなものと関連させて人格全体の問題も考える必要がある。認識の能力をのばすことが同時に人格全体をのばすことにもなる。